

ようとする (§1) Swiniarski は、この理論を完成させようとは誰もしないであろうけれどもそうすることは不可能ではないとみている。なおこの Swiniarski の論文はニューヨーク州立大学に提出された博士論文 (*Theories of Supposition in Medieval Logic: Their Origin and Their Development from Abelard to Ockham*) の一部である。雑誌に発表された分の構成は次の通りである。

§1: The *Summa Logicae*—Ockham's theory of Signification—Ockham's general theory of Supposition—Ockham's theory of Personal Supposition. §2: The *Tractatus Minor* and the *Elementarium Logicae*. §3: A comparison of Ockham's theory with those of his predecessors. §4: Some contemporary criticisms of Ockham's theory. §5: Summary and conclusion.

FRANZ K. MAYR: Trinität und Familie in *De Trinitate XII*

Revue des études augustiniennes XVIII 1-2, 1972 s. 51-86

中 川 純 男

アウグスティヌスの思想がギリシア哲学、とりわけプラトン、プロティノスの思想の大きな影響のもとにあることはよく知られている。しかしアウグスティヌスがどこまでもキリスト教信仰に立つ思想家であるのに対し、プラトン、プロティノスは彼から見れば異教の哲学者である。彼らの思想はギリシアの神話宗教における宗教体験を背景としている。したがってアウグスティヌスは彼らの思想を受け入れるにあたり、ギリシアの神話宗教、さらにそのヘレニズム化された形態である当時の民間信仰の宗教体験とも出会い、対決せざるをえなかった。この論文は『三位一体論』第12巻に論じられている問題を手がかりに、プラトン、プロティノスを通して伝えられた異教世界の宗教体験がアウグスティヌスの思想にいかなる影響を与えたかを、その積極的側面、否定的側面から明らかにすることを意図している。

ギリシアの神話宗教の歴史は母系中心の (matriarchal) 神々が父系中心の神々に征服され、ついに父なるゼウスの支配する世界へと至る過程であった。この過程に

対応する歴史がギリシアの哲学にも見られる。アリストテレスが指摘しているように、ギリシア哲学の始めに位置づけられるイオニア学派の求めた事物の質料因とは神話宗教において母系神として述べられていたものの哲学的表現と言えよう。そしてプラトン、アリストテレスにおけるイデア、形相による世界理解は神話宗教において父的神の支配として表わされていたことの非神話化された表現なのである。しかしこの父的神の一元的支配へと至る過程の中で、かつて母系神として表わされていたものが完全に哲学史から姿を消してしまったわけではない。プラトンにおけるコーラー、アリストテレスにおける質料は、イデア、形相に存在的に対立する根源としてやはり母系神の非神話化された表現なのである。

『三位一体論』第12巻において提出されている「人間の家族（父、母、子）は神の三一性の似像であるか」という問いとそれに対する答えにおいて、プラトン以来の人間観と聖書の人間観が出会っているのであり、ギリシアの神話宗教にまで遡って考えるとき、この問いと答えの意味がいつそう明らかになる。

ここで著者が聖書の人間観と呼んでいるのは「人は神の似像である」という思想である。ところが『創世記』1, 26-27によれば男も女も共に神の似像につくられたと言われているのに『コリント前書』11, 7によれば男のみが神の似像であると言われている。この二つの箇所はいかにして調和するのか。アウグスティヌスによれば、パウロのことは精神の男性的部分について語っている。神の似像であるのは精神の男性的部分のみであって女性的部分は含まれない。このかぎりにおいてパウロのことは意味を持つ。しかしこの精神の男性的部分は男にも女にも共通である。このかぎりにおいて『創世記』のことは妥当する。

以上のような考えに基づいてアウグスティヌスは「家族が神の三一性の似像である」とする見解を反駁することができた。すなわち人間の家族はその文字通りの意味において神の三一性の似像ではない（このような見解を支える根拠は聖書に何ら見出されない）と同時に、人間の精神の内の男性的部分、女性的部分が神の三一性の似像なのでもない。言い換えれば、神の内に女とのアナロジーで見られる働きは何ら求められない。この点においてアウグスティヌスは、形相を与えるものを男性的なものと捉え、形相を受けとる女性的なものの上に置くプラトニズムの伝統を受け継いでいる。すなわち彼はギリシア哲学の歴史に見られた父的神の一元的世界

支配へという方向の延長線上に立っている。では、プラトン、アリストテレス、プロティノスにおける母的神の哲学的表現であると見られるカオス、質料はいかに理解されているのであろうか。

この問題に対するアウグスティヌスの態度は、彼がギリシアの哲学者（プラトン、プロティノス）の内に御父、御子についての予告を見ながら、聖霊についての予告を見ることができなかつたとき明らかである。プラトンは『ティマイオス』でイデアー父、デミウルゴスー子、カオスー母という三一的構造を述べており、プロティノスは一者、知性、世界靈魂という三一的構造を考えている。アウグスティヌスがギリシアの哲学者の内に聖霊の予告を見ないのは、カオス、世界靈魂がその否定的性格として含意している質料のゆえであることは明らかである。神の内に女とのアナロジーで考えられるものを認めないことは形相的根源に対立する質料的根源を認めないことである。このような態度が父なる神への信仰に基づいていることは言うまでもない。この意味において母的神を全面的に否定するアウグスティヌスの思想は、父的神の一元的世界支配へと向って来たギリシア哲学の完成とも言える。

以上のような見通しに基づいて著者は、この父的神すなわち形相的根源による一元的世界支配という広い意味でのプラトンの世界観がアウグスティヌスの思想に一つの限定を与えることになったと指摘する。

アウグスティヌスは聖霊を女とのアナロジーで見ることを認めない。また人間精神において神の三一性の似像が求められるのはその男性的部分においてのみである。従って彼にとって聖霊の似像は精神の男性的部分の自己愛であることになる。しかしながら聖霊の賜物たる愛によって実現する愛が兄弟愛であることはアウグスティヌスによっても認められている。兄弟愛とは人格と人格の間に成り立つものであるから、自己愛よりもむしろ男と女の愛に連なるものとして捉えるべきである。アウグスティヌスが聖霊を女とのアナロジーで見ることを拒否したとき、彼は神の本質に属する愛と聖霊にのみ属する愛の区別をも失なった、と著者は結論する。著者のアウグスティヌスを見る立場は「アウグスティヌスはプラトンの人間観をキリスト信者として克服しようとしたが、神学者としての理論的思惟においてはついに逃れえなかった」ということばによくあらわされているように思われる。

しかし愛の理解についてのこのような指摘が正当であるかどうかは疑問であろう。

著者は『三位一体論』第8巻10, 14を例にとって、この箇所で「キリスト信者における愛 *charitas*」と「自然本性的な愛 *amor*」が区別されていないと指摘するが、この二つの愛をこのように規定することがアウグスティヌス自身の用法にかなっているかどうかは問題であろうし、またこの規定を認めるにしても「自然本性的」ということを全くプラト的な意味に理解してよいかどうか問題であろう。自然本性的なものといってもそれはアウグスティヌスにとって神につくられたもの以外ではなかったはずだからである。また聖霊の似像たる精神の最高の部分の自己愛（アウグスティヌスにおいてそれは神への愛でもある）が自然本性的な愛の内の最高のものであるならばそこから兄弟愛が生ずるといって一方通行になるであろうが、前節においてアウグスティヌスは兄弟愛により神への愛がいつそう深まるとも述べている。

最後に著者は次のような問題を提起している。アウグスティヌスは母系中心的神観を斥けるが、彼の反対はその質料的性格に向けられているのであって、そのもとに理解されていた世界に内在する神的な力を斥けたわけではない。むしろ万物における神の現前は聖霊の働きのもとに理解されている。かくして世界靈魂の考えはその質料的性格を取り除いた上でキリスト教信仰にとり入れられ、アウグスティヌスは「ギリシア人は聖霊なしに哲学した」という彼自身の表明とは反対に、聖霊と世界靈魂との隠れたアナロジーをキリスト教にもたらすことになった。そして「非キリスト教の宗教体験における三一なる神の働きを明らかにするという将来への課題を残すことになった」と結ばれている。